



Title	対人支援活動において求められる社会構成員としての力量
Author(s)	小山田, 奈央
Citation	社会教育研究, 19, 73-83
Issue Date	2000-012
Doc URL	http://hdl.handle.net/2115/28534
Type	bulletin (article)
File Information	19_P73-83.pdf



[Instructions for use](#)

対人支援活動において求められる社会構成員としての力量

小山田 奈 央

はじめに

筆者の問題意識は対人支援活動を行うものにとって求められる力量とは何か、そしてその形成には何が求められるのかという点にある。対人支援活動を行う者として、筆者が想定しているのは主として教育関係者、福祉関係者、医療関係者など、つまり人々の成長や生活など「生きること」のなかで単独では克服あるいは実現不可能な事柄に関して、専門的な知識や技術などを持って支援していく人々である。研究を進めるにあたっては、筆者自身のフィールドに立つため、主に障害者支援に関わっての支援者の力量が主軸になると考えている。しかし、人が人を支援するという関係性の側面においては他領域の支援活動との差異はないのではないだろうかと考えている。支援―要支援関係にとって重要なのはその関係が常に社会的文脈の中に位置付けられているかどうかということだからである。

1 現代の障害者支援

現代の障害者問題克服のプロセスにおいて「当事者主体」は前提である。この前提に支えられた全世界的な障害当事者の主体的な運動は、障害者自身の持つ「障害」(disabilities)への対応を求める動きではなく、障害を持つが故に生じる様々な社会的な不利(handicap)を克服しようという動きであり続けた。日本ではノーマライゼーション概念の到来とともに障害者はそれまでの社会から分離・隔離する「対策」の対象者という位置づけから脱したが、その後も社会の「保護」を受ける単なるサービスの対象者として捉えられる時期が長く続いた。障害者が同等の市民としての権利を有する存在であることの認知に結びついたのは、障害者の主体性確保・確立が目指されるようになってからである。WHO(世界保健機構)の提唱した障害分類(1980)や、障害者の権利宣言(1975)、知的障害者の権利宣言(1971)はこの認識のための一助としては大きな役割を果たしているだろう。それらから私たちは障害者の求める支援が社会的な文脈に位置づけられていることを読み取ることが出来る。社会的不利益は、障害を持つ人々にとって最も大きいのしかかる「障害」であり、単独での克服が困難なものなのである。

障害者の望む支援が奉仕や慈愛の精神に基づく介護やカウンセリングの技術などではないということが認識されるに至ると支援者のスタンスも自ずと変化の必要に迫られてくる。かつて「指導者」

的な役割を果たしていた彼等は、「共に生きる」ことを根拠に「施設依存」からの脱却を試みる。小規模作業所や近年になって広がりを見せている地域生活支援センターなどは先駆であり、「地域生活」「自立生活」を現実のものにするための「施設依存」への新たな対抗である。それらはこれまで、新しいサービスを生み出し、制度を作り、行政を動かし日本の福祉の一面を担う市民の主体的な活動として位置づけられてきた。しかし、果たして彼等の方策は最善なのだろうか。システムの構築の重要性は否定するものではないが、しかし、当事者の求める文脈における支援という点ではどこまで肯定されうるのであろうか。

障害を持つ当事者にとって、「ノーマライゼーション」とは単に「入所施設に依存せず、地域で暮らす」ということを意味するものではないことは周知のことである。もし対行政市民活動としての現段階がプロセスの一部だとしたら、「地域生活」「自立生活」のため支援者が最終的に目指すものは何なのであろうか。先述したが、障害を持つ人々にとって最大の困難は、社会的不利益である。つまり偏見や差別、それらを根底に持つ生活の質や人生における選択の幅の規制が問題なのである。これらを克服して行くためには、偏見や差別を生み出す社会構造そのものの捉え直し、変革が要求されることは言うに及ばない。

ここに支援者と要支援者の関係が常に社会的文脈の中になければならない根拠があると筆者は考えている。

2 「障害者」を囲い込むふたつの問題

「施設脱却」を実現し始めている現在の障害者を取り巻く環境が、実際には未だ社会的文脈の中にあることをつぎのふたつの問題から読み取ることが出来るだろう。

ひとつは「二極分化」である。「障害者」の周辺は、その家族の他に、施設職員・小規模作業所職員・学校教員、その他の医療・福祉等の専門職員などのいわゆる「支援者」と「ほとんど接点のない人々」とに分かれている。そのような状況の中では「接点を持たない人々」として障害を持つ人々は積極的なアプローチをしなければ会うことのない存在であると言ってよい。したがって、当事者のニーズにこたえて社会に対して開かれた「地域福祉」を目指す時、支援者はこの「接点を持たない人々」をどれだけ視野に入れて活動することができるのかということが鍵になるだろう。しかし、現在の日本の障害者問題の論点は、政策的場面への介入、あるいは障害者やその家族の抱える生活面における問題への介入というところに比重があると言わざるを得ない点で「障害者問題」を社会全体の共有の問題へと展開していく力には弱さを感じざるを得ない。また、このことは「支援者」と「接点を持たない人々」との中間に位置すると考えることの出来る「ボランティア活動」の扱い方にも現れている。ボランティア活動をする人々は開かれた地域福祉を作る際の積極的な協力者であるといえるが、障害者に対する支援職に就く人々は彼らを「駆動力」「労働力」とみなして

いる嫌いがあるのではないだろうか。

支援関係を社会的文脈から排するからくりのもう一つの原因に「対象化」がある。「対象化」は「障害者」と呼ばれる人々の自己実現には「支援者」が必要とされる場合が多いという必然性から来るものである。つまり「支援者」と「要支援者」の間には障害を「持つ人」と障害を「持たない人」という関係が生じ易くそれが同じ社会的存在であるはずの両者のバランスを不安定にする要因になりやすいということである。このバランスは「共生」や「ノーマライゼーション」と言った表現のみで理解されるものではなく、他者と自分の主体性を同等に感じることの出来る体験を通して人々に体現されていくべきものである。「支援者」もまた例外ではなく、既にある言葉や概念に頼って「支援者」―「要支援者」関係を作るのではなく、自らの経験に基づいた人間相互の対等な関係を構築することが必要である。しかし実際には、現代「障害者福祉」の積極性の中に「障害者のため」という一歩ひいた支援者像を目にすることは少なくない。「個人」の主体性の尊重は、支援者、要支援者のどちらにも保障されるはずであるが、没個人的な支援は各々の「個」の領域の曖昧さを生み、支援者自身の主体性だけでなく、要支援者の「個」すら脅かす危険性がある。

筆者は「二極分化」と「対象化」の問題は、障害を持つ人々を「障害者」に仕立てるからくりであり、支援者が社会に開かれた福祉を目指す時に解決していくべきものであると考えている。そのためには、これらの問題が支援者自身の自他関係の構築や主体性の保障、社会的存在としての自己認識などの不足から生じていることに気づかなければならない。筆者はこれらを克服するための力量を、支援者自身が社会を構成する主体性を持ったひとりの人間としての自覚に基づく力量――「社会構成員としての力量」として仮定している。これは、対人支援活動の専門的技量以前のものであり、専門職のみに特化され身につけられるべき力量とは言い難い。しかし、支援関係を社会的文脈に乗せるためには不可欠の前提的な力量である。

では、「社会構成員としての力量」の形成には何が必要となるのであろうか。その力量を前提とした時、なんらかの障害を持つ市民を「障害者」という社会的弱者の状態に陥れ「福祉」へと囲い込む状況の打開はどのようになされるのだろうか。

ここで北海道砂川市における精神障害者のための小規模作業所の展開を例に考察してみたい。

3 砂川市くろみ共同作業所の展開

1) くろみ共同作業所の概要

くろみ共同作業所は平成2年に設立された精神障害者のための小規模作業所で、砂川市の福祉センターの1階の一角を無料で借り受け運営されている。利用者は現在35名、砂川市内あるいは近隣の地域から通ってきている人々が多いが、市外から移り住んできているケースや、市立病院に入院

しながら通ってくるというケースもある。作業内容は種類が多く屋外では農作業、室内では請け負い作業や自主制作を行っている。農作業といっても、オーナー制リング園の管理や会員に関する事務処理を行う、あるいは野菜等を栽培して販売するなど、作業に終始せず、経営までを範囲としている。運営資金は主に市から助成金によるところが大きく、所長のみ無償であるが、5名いる指導員の給与はこれによってまかなわれている。指導員の勤続年数はおおむね2～3年で、ほぼ全員が福祉関係のキャリアを持っていない。また、長期の海外生活を経験しているなどユニークな経歴を持つ指導員がいることもこの作業所の特徴である。

利用者の多くが市立病院からの紹介であることからわかるように、この作業所は病院との結びつきが強い。特に精神障害者が病院や家庭に閉じ込められることなく、地域で暮らしていくことの出来る環境が大切との考えが当初から医師側にあったため、この小規模作業所はそのような位置から出発している。しかし、現在に至るまで砂川市立病院には精神保健福祉士（PSW）が配置されていないためPSWではない病院のスタッフが患者達の生活面までを含めたサポートをせざるを得ないのが実状であったと推測される。同時に退院後に利用できるデイケア等の数が少ないこともあり、設立時に病院が大きく関わったこの作業所には患者の退院後の生活面のサポート、フォローの役割を持っていることも事実である。また、退院はできるが社会復帰するまでにはもう少し時間を要するという患者ですら、作業所に入ってくるという場合にも対応しなければならないという。

砂川市立病院の精神科は評判があり、通院するために市外から移転してくるケースもあるため精神障害を持つ人々の町全体における割合は比較的高めであることが予想される。したがってたったひとつしかない作業所にかかっている負担が大きいのことは否定できないであろう。

いくつかの問題を抱えてはいるが、この作業所が利用者に対して提供する環境は決して質の低いものではない。利用者（メンバー）に対する聞き取り調査の結果（表1）、作業内容の多様さや余暇の充実、指導員と利用者の関係、市立病院との連携などにその要因を挙げることが出来るが、最大の要因は現在の所長Uさんの運営方法やそれを支える理論にあるのではないと思われる。ここからは、Uさんの運営の視点・方法、そしてUさんを中心とした地域住民のネットワークについて詳細に述べていく。

表1：利用者に対するインタビュー

	aさん (27歳・男性)	bさん (29歳・女性)	cさん (51歳・男性)
作業所について	来て良かった／仲間がいる／憩いの場	居場所	気楽さがある／理解しあえる
仕事内容	リング園	室内作業（箱詰作業等）	農園・リング
所長のUさんについて	まじめ／一生懸命／リーダー	心強い	頭がいい／陽気／思いやり／意見を聞いてくれる
相談相手	指導員	病院の先生	病院の先生
これからしたいこと	碁（コンピューター）	フェルトの染色	何かの資格を取りたい。

2) Uさんとくろみ共同作業所

くろみ共同作業所の現在の体制が整ったのは平成10年ごろ、Uさんが所長に就任してからのことである。

Uさんは、元広告代理店勤務のサラリーマンであったが、「40歳になる前にサラリーマンをやめたい」と言うかねてからの願いを実現させ札幌から移転し、現在は砂川市で陶芸を中心とした芸術活動を行っている。砂川には平成元年頃、精神科医の妻の異動で移ってきたのだが、その時がちょうどくろみ共同作業所の設立時期と重なり「白羽の矢が立つ」形でその所長に就任した。その後数名の所長を経て現在は2期目の就任である。

Uさんは「障害者」あるいは「精神障害者」にはこれまで全く興味を持ったことがなく、「支援」ということについても何のモデルもイメージも持っていない。しかし、メンバーがインタビューでUさんが所長になると「作業所の雰囲気もがらりと変わる」と語っており、しかも欠くことの出来ない人として認識されていることがうかがわれた。

Uさん自身は聞き取り調査の中で、小規模作業所所長になった経緯についてもともと広告代理店で企画を担当していたと経験と絡めて「こういう地方都市（砂川市）の中でどういう風に組み立てれば一番流れとしてやれるかという組み立てができた。できた以上はやらざるをえないので……」と語った。インタビューの中でキーワードとなっていたのは「組み立てる」と言う言葉であった。現状の条件や立場を見据えて、どのようにして行くと上手くいくのか、というのがUさんのいうところの「組み立てる」ことである。Uさんが2期目の所長に就任して、最初に行ったのはそれまでの作業所の方法や作業内容までもをそっくり見直し、組み立てることであった。

以下に、Uさんの作業所運営に対して持っている考えと具体的にとっている方法とをまとめた。

【砂川の分析：農業と地域財産】

砂川市は農・工・商どれを取ってもまちを目立って特長づけている産業があるわけでもなく、人数は減る一方。市民が全体的に消極的な上に、行政は市民のしていることに対して無関心である。しかしそれが逆に障害者差別の少ない点や行政が関わってこない分だけ制約が少なく活動しやすい点につながっているようである。砂川市における障害者のポジションを考えると袋小路に入ってしまうので、砂川市の地域的な課題と障害者の位置付けを考え合わせ、農業を作業所の仕事の中心にした。また、砂川市はいずれ周辺市町村との統廃合で消滅してしまうと思う。だから行政的な区分けでの「砂川市」にこだわるよりも、地域としての「砂川」の財産を作ることのほうが大切だと思う。

【砂川市とくろみ共同作業所を組み立てる：小規模作業所の建て直し】

まず、旧態的な考え方を残したくなかったので、指導員の完全な入れ替えを行った。新しい指導員には障害者に対して物差しを持たない人、組織から外れた（途中下車した）人を選んだ。次にそ

れまで運営にもかかわっていた家族会を重要な役割から外した。家族会を客観的なものにしたかった(家族が関わると問題が複雑になるときがある)。また、情報公開を徹底し、ガラス張りの運営にすることで問題を起し難くすると同時に後を継ぐ人にも内情がわかりやすくなると考えた。

仕事は多様化させた。それまでは、室内軽作業が多く、互いの仕事のペースや成績などがメンバー同志で分かっけてしまい、給料への不満に繋がり易かった。しかし、農作業中心に仕事場を作業所内外に複数用意したことでメンバー一人一人の個性や適性への配慮と同時に競争意識の緩和に繋がった。

また、ボランティアは完全な無償では継続して行きにくいのが実情だと思う。続けるには金銭的なものでもやりがいなどの精神的なものでも見返りがなければならない。地域のお祭りやポストカードセットの作成・販売は、見かえりを生み出しつつ、地域の人々とつながって行く一つの方法である。お祭りイベントは「金はかけない・儲けてはいけない・損してはいけない」の原則を作って、公的な助成金などに頼ったりすることはない。むしろボランティアと情報を駆使し、組み立てることから出発すればできるものである。

この作業所の地域での展開にはユニークな点が多い。年に数回のお祭りが地域で催され、この作業所では栽培した野菜や製品などを販売するなどの形で参加しているようである。特に廃校になった校舎を無料で借り受けることが出来るようになってきているためそこで開催するものは規模は小さいものの、展示即売だけではなく、プロ・アマ問わず写真や芸術作品などを展示し、芸術祭のようである。

3) Uさんと友人グループ

この作業所はボランティアに関しては受け入れを積極的に行っているわけではないが、地域に住む人たちによって作られているネットワークと強いつながりを持っている。しかし、そのネットワー

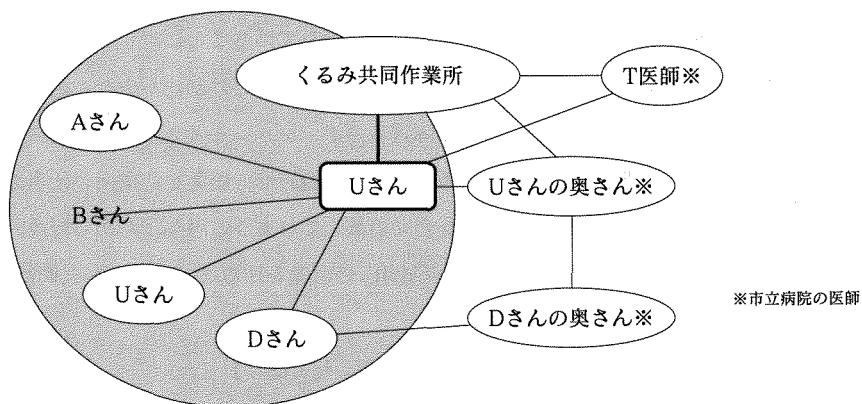


図1: Uさんを中心とするグループについて

クは作業所があるひとつのコミュニティに入り込んでいるというよりも、むしろ点と点が結びついて作られていると言ってよい。そしてこのネットワークの中心はこの作業所の所長 U さんがいる。つまり、くるみ共同作業所を支えるために作られたネットワークではなく、U さん個人の友人関係、ネットワークがいつの間にか作業所と重なるようになったということが見えてくるのである（図 1）。つまり、現在くるみ共同作業所と関わりを持っている人々は医療スタッフを除いては、もともとは U さんと行き付けの喫茶店が一緒だったり、趣味が似ていたりということを通して友人となった間柄なのであって、U さんが小規模作業所を立て直そうとして地域に入り込む作戦のために作ったネットワークではないのである。この作業所は地域の人々との強い結びつきを持っているが、聞き取りの中でほとんどの人が「いつの間にか」「ズルズルっと」くるみ作業所の人々に関わるようになったといい、同時にこの関係に居心地の良さも感じていると述べている。インタビューの結果については、表 2 にまとめた。

表 2：U さんを中心とするグループについて

	A さん（菓子店）	B さん（喫茶店）	C さん（自動車修理業）	D さん（林檎園経営）
出会い	6 年前 おまつりを通じて	10 年くらい前に行き付けの喫茶店で出会う。	3 年くらい前。A さんの紹介。	奥さんを通じて。 5・6 年前から。お祭りを通じて。
関わり	まつりの実行委員 ポストカードづくり 写真	自作の喫茶店をはじめめる。 お祭りで手打ちそば・うどん	お祭りの実行委員 くるみの自動車修理 ポストカードづくり	オーナー制のリンゴ園の管理委託職親（一名） ポストカードづくり
くるみのメンバー に対するの考えかた	受身／距離を取っている／空気の／障害に対するのモノサシを初めから持っていない／店に買い物に来てくれるようになった。	別の施設で知的障害者との関わりがあったので、特に先入観ない／同等な付き合い	自分に対して誰も嫌な顔をしない／行く／と落ち着く	先入観はあったが今はない／自分もゆっくりやってもいいのかなと思うようになった。
U さんについて	訳のわからない人。いつのまにか引き込まれる。	理想の人（来る者拒まず・去る者追わず）誰に対しても親身。	いいかげんなどところと真面目なところがちょうど良い。付き合い易い。	妙な引力を持っている。いいところ、ダメなところのバランスがいい。
現在のグループ に対するの考え方	自分に対しての一過性の自己満足。楽しんでいる	出入りが自由。 趣味を優先できる。	いろんな人と出会うことで「勉強」になる。 損得で動かない。精神的な余裕がある。	色々な人がいて刺激になる。楽しい。楽。人間のペースで動いている。損得で動かない。いろんな職種の人がいる。
グループに関わる ようになってからの 自分の変化	自分の写真の表現力 につながった気がする。	得るものが多い。喫茶店をはじめたのも内海さんからの影響だと思ふ。	気が長くなった。自分なりのプラス思考。世の中の見方や人の見方・接し方が変わった。	砂川を楽しい町だと思ふようになった。生活にメリハリ。仕事にもプラスに。
その他	行政や商工会が参加するとたぶん上手いかなと思う。			砂川をもっと楽しい町にしたい。客商売の農家になりたい。

このグループには特定の名前はなく、何かを催す時に「リンゴの木を守る会」「くるみ共同作業所ボランティアの会」などと名前を持つ。構成員の職種は様々でグループへの出入りも自由である。その時々個人の都合や心境で付いたり離れたりすることができるのである。特に取りまとめ役がいるわけではなく、そのイベントごとに事情のわかっている人が責任的な役割を担うそうである。組織であって組織でないグループである。

「出入り自由」「来るもの拒まず、去るもの追わず」が自然の状態のこのグループは、誰がメンバーであるのかということもはっきりとは認知されていないが、必要な時に集まったり、共に楽しんだりというグループとして存在はしている。また、このグループで特長的なのは芸術活動を媒介にしているケースがあるという点である。くるみ共同作業所の所長Uさんと関わることで芸術活動を本格的に始めた人もいるというが、これはUさんが陶芸や鉄工を中心とする芸術家であることと関係がある。

4) Uさん自身について

Uさんが以上のような視点を持ち、作業所運営に携わっていることをさらに掘り下げると、Uさん自身の持つ自分自身の将来的な展望や思考の枠組みが見えてくる。以下にそれらを挙げてみる。

【自分自身のしたいこと】

本業でしていることやしたいことが他にあるので、現在の所長職を早く辞めたい。所長であることなどには全く興味がなく、現在のメンバーには消しゴムで消すように忘れ去られたいと言っている。しかし、当面の組み立てが終わって、後継者が後を継げるようになるまでは続けるだろうし、今手をつけている問題以外の問題が生じたら新しい対処策を組み立てるために続けるかもしれない。その時になってみなければ分からないが、所長と言う肩書きは一日でも早く外したい。作業所所長は一経過地点であって欲しい。ただし、作業所の枠組みを組み立てること自体は、自分にとってはとても楽しいことではある。

【途中下車】

組織を辞めるということはつまり、途中下車するという。組織から離れると途端に個性と自己責任の世界に入ることになる。この作業所に来ている人たちは自らの意思に反して組織から外れざるを得なかった人たち。そう言う意味では、自分もメンバーも同じように途中下車した人々で、これからの時代は組織人と非組織人とで二つの文化が出来るのではないかと考えている。つまり組織と資本主義ルールにしっかりと乗って徹底して利益を追求する者と自己主張と自己責任のもとで毎日を過していく者の二つの文化である。

【地域で生きる】

小規模作業所の所長となり、精神障害者と関わるようになって「地域で生きる」ことを考えるようになった。自分の生活しているポジションを拠点としてまずは見通しのきく範囲から考えていくと「地域で生きる」ことに繋がる。今日的課題は大小含め多々あるが、「日本をどうするか」「北海道をどうするか」で考えるよりもまずは自分の立っているところからだと思う。

5) 支援者Uさんについての考察とまとめ

Uさんへのインタビューを進めて行くと、Uさんと利用者との関係が見えてくる。特に相互に精神的な依存関係がないことがわかる。Uさんは確かに頼れる人ではあるし現在の作業所にとっては欠くことの出来ない人物である。しかし、利用者にとって心理的の支えになっているのは市立病院の医師であったり、作業所指導員であろうことが利用者へのインタビューから推測される。何より、Uさんが自分自身の人生や生活をどうしたいかということをはっきりと持っていて、障害者の支援者であることを自分自身の主体性の根拠とせず、自分自身を主体的に生きようとしていることがわかる。このことから、「支援者」以前の「自己」に対する認識度の高さがうかがえる。しかし、それが自己中心的に働いておらず、作業所を内輪で切り盛りせず外側に展開して行こうとする発想に結びついている。このことは障害者問題で考えることによって入り込んでしまう「袋小路」を避ける考え方で、「単純な人に対する興味」から生まれる友人グループをベースとした地域住民との繋がりから見取ることが出来る。

さらにここでUさんに特長的なのは、今おかれている現状と条件を活かす力量を持っている点である。自分の関わっている障害を持つ人々の環境改善のための切り口を「障害者問題」「人権問題」にして解決をはかって行くのではなく、地域の問題と重ね合わせながら「組み立てる」という言葉を使って理論を作っていく。

小規模作業所は障害を持つ人々の日々の生活に関わって個別に対応するいわばミクロ的支援の場である。その裏には障害者に関わる社会構造や政策的な問題といったマクロの問題が常に同時進行しつつ、その問題解決のための市民活動も多くある。Uさんは小規模作業所の立場にありながらこのミクロとマクロ両面の問題を視野に入れて理論を作っていることがインタビューで分かった。しかし、砂川を分析して「理論先行で行くと住民はついて来ない」と述べており、運動でマクロ的問題の解決からはじめることを考えていない。むしろ利用者の個々の生活的問題と社会問題としての障害者問題とを「地域」をキーワードとして融合させてゆっくり進めていくことを考えている。そして現段階で取り組むべきことがらを利用者の生活環境に設定して取り組んでいくのである。

今回の調査で、把握されたのは地域へと開いていく小規模作業所とそれを可能にする支援者の視点の所在である。

もちろん地域展開の点から見てこの作業所の方法に問題がないとはいえない。

この作業所の展開方法はUさん個人の持つ力量に頼っている。Uさん自身は「枠組みをつくる」ためだけに所長をやっているからその手法さえ、現在の指導員に引き継いでもらうことが出来たら自分は身を引くと語ってはいるが、他の人たちへのインタビューでは「彼でなければできないこと」という意見を多く聞いた。実際、Uさんの持つ力量は障害者支援に関わる力量とは言い切ることが出来ないものがあり、むしろ全体のコーディネート、マネジメントの能力と言えるが、それは専門的支援技術よりもUさん自身の思考様式に頼っている。つまり、Uさん以外の人切り口を同じくしても、利用者地域、障害者問題の生活的側面と社会的側面を同時に見ながら、現状に沿った展開をしていくことが出来るのかについては不確定である。

また、これは小規模作業所全般にいえることだが法定施設と比べて、社会的、政策的な制限から免れているといった点や、運営する者が必ずしも専門教育を受けていないと言う点も検討項目に上げることが出来るだろう。

しかし、支援者があくまでアイデンティティを「自己」に置き、自らを主体的に作業所と同化させることなく生きていくことは作業所を内側でなく外側へと展開させる可能性を持っていることが今回の調査で言えるのではないだろうか。同時に支援者が作業所の外側との繋がりを持った時、その支援者を介して多くの人々が障害を持つ人々と出会うことは重要であり、これまでの道徳的・倫理的な理論や障害者にまつわる感動的なストーリーによって訴えられるノーマライゼーションを大きく乗り越えて行くのではないだろうか。つまり「ノーマライゼーション」や「バリアフリー」という言葉を用いなくても多様な人々がいること、そしてくそのような社会の中で生きていくことの意味に関わる人々の中で内面化される過程がそこに現れるのである。

このような過程を生み出すことのできるUさんの視点は、筆者が提起した「二極分化」と「対象化」の解決策をその内に抱えていると考えられる。つまり筆者の想定している「社会構成員としての力量」の具体的内容を求めて行く際の示唆になるのではないだろうか。

4 今後の課題

今回の調査で、対人支援活動において支援者が主体性を持って活動することには、「二極分化」と「対象化」を克服し、障害を持つ人々の生活を社会とは隔離された「福祉世界」に追い込むことなく展開させる可能性を持つことが推測された。

しかし、障害者支援の様相はここ数年で多様化してきており、公的な支援とインフォーマルな支援との相克、障害を持つ人々自身の主体的活動の活発化や支援活動の恣意的な細分化が進んでいる。今後はその現状を踏まえつつ、「人が人を支援する」という関係性を取り扱っていく必要があるように思う。

今回は実際に支援活動を行っている人物を通して、対人支援活動に求められる具体的力量に迫った。今後はこのように個々の事例検討を通して実際に求められる力量の検討を進めるのと同時に、それらの力量を形成するために求められる学習過程とそこにおける教育的支援のあり方について専門職養成の現状を含めて検討を進めて行きたい。特に、筆者は対人支援活動を行う者が抱える問題が支援者における自己知覚能力の低さ、自他関係構築の不十分さなど、つまり専門的技量以前の力量＝「社会構成員としての力量」の不足から生じていると考えている。そのため、多大な課題を抱え汲々とする現代日本教育の成果としての人々が、果たして現状の対人支援職養成機関の提供する教育で、十分に育成されるのか、その打開はどこに求められるのかということについてフォーカスしていくつもりである。

筆者自身はエンパワメントの側面を持つ教育としての社会教育の主張を教育の本質的議論の所在として考えている。今後は、これまでの対人支援職養成を社会教育にリンクさせながら展開して行きたいと考えている。

参考文献

- ・『発達障害白書 1999』 日本知的障害者福祉連盟編 日本文化科学社 1998
- ・『ソーシャルワーク倫理ハンドブック』 中央法規 1999
- ・『自治と当事者主体の社会サービス』 大谷強 現代書館 1999
- ・『エンパワメントの教育学』 鈴木敏正 北樹出版 1999